

シェリングの風景画論における雰囲気

—主観と客観の協働として

八幡さくら(東京大学)

F・W・J・シェリングは講義『芸術の哲学』(1802-03、1804-05年)の中で芸術ジャンル論を展開している。その中でシェリングは絵画を近代に優勢な芸術として認め、描かれる対象に応じて絵画ジャンルを分類する。絵画は静物画・植物画・動物画・風景画・肖像画・歴史画として分類され、後者の方がより高次の芸術ジャンルに位置する。シェリングによれば、風景画は非有機的なものを対象とするが、動的であり、静物画や動物画よりも高く評価される。シェリングが風景画を高く評価する理由の一つに、「光そのものを対象とする」芸術であることが挙げられる(SWV 544)。シェリングの絵画論は、本来的には理念的なものである光がいかにかに物的なもの結びつき、色をもって絵画に描かれるのかを論じている。

さらにシェリングは風景画論において「雰囲気」(Stimmung)概念に注目している。ドイツ語のStimmungは日本語で「気分」や「雰囲気」と訳されるが、自分の内的気分だけでなく、周辺や環境の持つ外的雰囲気も意味する。シェリングは、人間が自然から全く異なる存在ではないという視点に基づき、主観と客観との相互作用的な関係性が風景の本質に関連すると論じる。この点で彼の議論は主観と客観、精神と自然を区別する西洋の伝統的な二元論的思考方法とは異なる仕方で、我々に人間と自然の関係を再考する新たな視座を提供する。また近年、シェリングの風景画論における受容美学的側面が指摘されており、制作論にとどまらないシェリング芸術哲学の性質が明らかにされている(Zerbst 2011)。

また、シェリングは『芸術の哲学』を論じるために、A・W・シュレーゲルから『芸術論』のベルリン講義ノートを借用しており、個々の芸術家や作品の評価についてシュレーゲルから多くを負っている。それゆえ、シェリングの風景画論の独自性を把握するためには、シュレーゲルの風景画論との比較が必要である。19世紀にはC・D・フリードリヒやP・O・ルンゲ、C・G・カールスなどのロマン主義の画家によって風景画が盛んに制作されるようになる。とくにルンゲはシェリング哲学に自身の芸術思想との親近性を見出しており(Büttner 2010)、ロマン主義の画家たちの芸術論とシェリング芸術哲学との思想的影響関係が明らかになっている。

本発表では以上の研究背景を踏まえ、雰囲気概念に着目して、A・W・シュレーゲルの風景画論と比較することによってシェリングの風景画論を把握する。次に、シェリングの風景画論に基づく場合、風景画においていかにかに構想力によって主観と客観が働き、絵画が制作され、鑑賞されうるのかを検討する。最後に、シェリングと同時代の風景画を取り上げ、シェリング風景画論の作品分析への適用可能性を検討する。以上の議論を通して、画家のみならず鑑賞者の主観と客観との協働の中で創造される芸術として風景画を解釈する。